

水の坂

諏訪正樹

この緩やかな坂を上って家路につくとき、哲生は水と向き合^{てっお}って歩く。

道に沿って走る用水路が、この辺りでは急流になって流れている。

武蔵野で玉川上水から分水され、用賀村を通ってここ野澤村に至るらしいが、哲生はこの坂道より上流に行ったことがない。坂を上り切ると、村のすぐ西を走る尾根道にぶつかる。用賀村から尾根に沿って流れてきた水路は、あそこで尾根を離れ一気に下ってくるのだ。

尾根の向こうはみえない^二。哲生はこの坂の水をみつめていれば、それでよかった。

「それにしても今日は荒々しいな」

坂を一気に下る水は、川底の石や岸に激しくぶつかりバクバクと音^三を立てているのが常だけれど、いまは更に渦も巻いている。水の粒子ひとつぶひとつぶが、我先に下流へ進まんとせめぎあうようだ。ゆったりと、のっぺりと、水路全体がひとつの個性にまとまって流れる日もあるのに。

水は生きることの鏡かもしれない。水の坂を上りながら、ときにそう想う。

「今日は意外にセロリがよく売れたな」

水の流れが緩やかになり、水路がㄅ字にカーブする辺りに市^四が立っている。

哲生は兄夫婦と一緒に収穫した野菜を商うために、毎朝この坂を下り、商いが

――

一 現在の環七通りがこの辺りの尾根道である。北のほうから環七を南下すると野沢交差点で斜め左前に入る道が現れる。それがここに登場する坂道である。品川用水は現在の環七を南下し、まさに野沢交差点の位置で、二股分かれ道の（現在では）マイナーな方に曲がついていたのである（型^一とは20番）。

二 脚注十二を参照。

三 水の音が住処近くにあるのはよいものだ。日によって音に微妙な差異があることを感じれば感性豊かになる。急流と向き合い家路につくとき、哲生は生き方について内省する。この坂が水路であったことを知った僕はそんなシーンを想ってみた（型^二とは13番）。脚注七も参照。

四 品川用水の道は学芸大学駅の手前でㄅ字カーブを描いている。ㄅ字の中心位置（変曲点の位置）を現在は駒沢通りが貫いている。水路がㄅ字形を形成する場所で人はふと佇み、その結果その地は栄えるのではないかという仮説をわれわれは抱いている（型^三とは34番）。繁栄した地であったからこそ、後年、駒沢通りのような街道が貫くのである。そこには市があつたと想像し、主人公哲生が通う設定にしてみた。

終わる夕刻にこの坂を上るのだ。

最初は、収穫した野菜を市の八百屋に売りに行くだけだった。八百屋の親爺が体調を崩してからは、店の一角に座って売る手伝いもするはめになった。

朝この坂を下るのが哲生は好きだ。真つすぐに陽を浴び、点々と大木が並ぶ^五この道を、水とともに市に向かう。荷は重いが、その日の商いに期するものがある。朝は水路の下流から流れる風が市の匂いを運んで^六くる。魚が大量に商われる日は、それなりの気配を感じる。どじょうやナマズがある日は土臭さが加わる。八百屋の店頭に立つようになってから、魚の商いは野菜の商いにも影響することを知った。魚の量が多い日はなぜかセロリと大根が売れる。

がつこんごとごと、がつくんごとごと、……

家路につく哲生をいつもの音^七が迎える。

哲生の家は坂の中腹にある野澤村随一の大木の脇^八を右に入り、農地を抜けたところにある。大木の手前には水車小屋がある。

水の流れがどんなに激しい日も、小屋の手前で流れが調整されているので、水車が廻る速さは常に同じだ。

水車が配る水のおかげで野菜をつくることができている。

この音を聴くと「帰ってきた」と思う。

いつもと同じ調子の音を聴いて、ずっと続くであろうこの生活の安定を願う。

水車を管理する地主の家では、水車の動力で蕎麦の実を挽いている。

なんでも目黒のほうの店に卸していると聞く。

昼間挽いた残り香^九に、哲生の腹がくうと鳴った。

五 かつての用水の道には大木が並ぶ。この道もそうであった。まさに道沿いに（型ことば24番）、少し水路から離れた場所に（型ことば25番）、10m以上もの大きな木が数多く生えていた。
六 水路に沿う道には自然に風が流れ、まちの匂いを運んでくる。市の匂いが季節ごとに変化するとしたら、それを感じる人達の生活は季節感豊かなものになりそうだ（型ことば26番）。
七 住処のそばに「いつもの音」が存在するのはこの上ない安心感をもたらすだろう。品川用水の大半の部分は平坦だったはずで、この野沢の地の急流はとても珍しいことであつたと思う。
だからこそ水車がそこにあり、他とは異なる水音が存在する地であつたと想像できる（型ことば13番）。脚注三も参照。

八 脚注五を参照。

九 脚注六を参照。水路に沿って風が流れるからこそ、蕎麦の実を挽いた匂いも漂う（型ことば

今日の晩飯は秋刀魚だ。

腰袋からふたつ、その頭が顔を覗かせている。

哲生は靖史から魚を買うことにしている。靖史は目黒川で卸の舟から魚を買い付け、2日に一度市にやってくる行商である。

市のすぐ脇には、下馬村に配水するための分水路^{二〇}の起点がある。分水路に沿って走る道は目黒川と野澤村を結ぶ主要路で、靖史はその道を通って市にやってくる。

「今日は秋刀魚が安いよ」

野菜がよく売れたこともあり、靖史のことばに財布の紐が緩んでしまった。

一匹は刺身にして、もう一匹は焼いた後に粕漬けにして寝かせるか。

靖史は用賀村や、尾根道を越えた向こう側の、哲生が名も知らない村にも足を延ばすらしい。目黒川からの主要路は尾根道の向こう側まで延びている^{二一}のだ。

「野澤の尾根道の向こうはね、山あり谷ありだけど、けっこう妙で面白い大木なんかがあったりするわけよ」

魚の行商が木にも興味があるのか？

妙で面白いって言ってるけど、水車小屋の脇の大木よりも凄いのか？

靖史のバイタリティを羨ましいと思う反面、哲生は尾根道より向こうの世界に興味は湧かない^{二二}。

――
^{二二}番。

^{一〇} かつての水路のㄏ字地域のすぐ脇には分水路の起点があったのではないかという仮説を立てたのは、用水道と駒沢通りの交差点のすぐ脇を、現在でも用水道と直角に、細く長い道が貫いているからである。蛇崩、下馬から、ここを通って柿の木坂に至る道で、目黒区と世田谷区の境界線でもある。当時の主要路であった可能性は非常に高く、そこへの分水があったとしても不思議ではない（型ことば ²¹番）。

^{一一} 脚注十に述べたように、目黒区と世田谷区の境界線であるこの道は、現在でも物語の場所を突き抜けて直線状に延び、結果的に世田谷区が目黒区に鋭角の形に食い込む要因になっている。かつての主要路に沿ってコミュニティ感が延びて（型ことば ²⁹番）いたとしたら、他の行政区に食い込むようなコミュニティ分割が生じたとしても不思議ではない（型ことば ²⁶番）。

^{一二} 緩やかな坂の頂点が少し離れているが見えていて、そこが尾根でその向こう側が見えないと、坂を上って向こうの世界をみてみようとは思えない心理になるかもしれない。もちろん、靖史のように好奇心の旺盛な人はその類いではない。ただ通りが広ければ尚更その傾向が強ま

この水とともに市に向かい、この水と向き合って坂を上る。
それだけで哲生は幸せなのだ。

水車の音が背後に消えた頃、哲生の腹がもう一度くうと鳴った。

——
るかもしれない。このまち観がたりに登場する坂は品川用水道のなかでも幅は広い。水車小屋
があったということも幅に寄与しているかもしれない（型ことば30番）。